

公刊される豫定であつたが、種々の事情で一卷にまとめたという事である。もし最切の豫定の如く、五巻が公刊されるならば、ここにのべた私の言は或は不要となるであらう。

(米田賢次郎)

唐宋時代の交通と地誌地圖の研究

青 山 定 雄 著

昭和三十八年三月 吉川弘文館
A5版 圖版八葉 本文六一七頁

このたび青山定雄教授が「唐宋時代の交通と地誌地圖の研究」を出版された。以前から同教授の従來の研究論文に啓發され、東洋史の分野で歴史地理學と呼ばれている學問に關心を持ってきた者にとっては、この出版は大きなまとまった知識の收獲であるばかりでなく、學界にとりまことに慶賀すべきことである。そして近來いわゆる社會經濟史學の盛行の影にかくれてしまつた觀を呈していた東洋歴史地理學界に漸く活氣が感ぜられる。先年刊行の松田壽男博士著「古代天山の歴史地理學的研究」と併せ考えると、この兩快學を中心に歴史地理關係の論考が従來よりやや多く發表せられているように思われる。

本書は二編から成る。第一編は「唐宋時代の交通」第二編は「唐宋時代の地誌地圖」で、最初に序文が見える。この序文には、まず北シナに興つた中國民族が南方に向い發展し、清の專制的中央集權國家ができるまでの歴史をきわめて簡単に述べ、交通の發達の觀點に立つて著者一流の中國史觀を展開している。そして、「唐宋時代における官用交通の發達と地誌地圖の編成の歴史を究明することは、

その時代の官僚政治ひいては統一國家の機能と限界とを窺う上にも重要な意味をもつと思われる」と言い、「本書において特に官用交通をとり上げたのもそのため」である、と述べている。「讀史方輿紀要索引支那歷代地名要覽」は餘りにも有名な勞作であるが、著者は人も知る通り若き頃から東方文化學院東京研究所において歴史地理を擔當され、今日にいたるまで數多くの論文を發表されており、この方面の碩學である。

第一編の第一第二は前に論考したものをさらに検討を加えて詳述したもので、第九はその一部を前に重點的に論じたことがあるのを全般にわたり述べたものである。大體本書はかつて著者が發表した論文の内容から成るがこの第一と第二とは、まだ三十才前後の頃の若き著者が世界歴史大系に書いた唐宋時代の交通に関する研究をあらためて補訂し、主要交通路についてその位置、利用と變遷、道路工事等を述べている。第一「唐代の陸路」は五つの地域に分けて考察しまず河南山東方面に向う交通路から筆をおこし、長安より潼關、洛陽、汴州等の東方に通じる路を重要路と指摘し、當時中國を東西に貫く路の中でもっとも重要な大路であつたと強調している。さらに汴州から汴河にそい泗州に行き、南して揚州を経て福州方面のびる交通路に觸れる。長安から河北山西方面に向うものは洛陽で前記汴河ぞい交通路と分かれ東北行し、孟津において黄河を渡り衛州(汲縣)を経て幽州に達する路をあげている。そして中唐以後藩鎮の獨立化にともないこの路が重要となつたと述べている。また同州蒲津關を経て太原に通じる路にも注目して、都から山西に達する要路と説く。三「湖北・湖南・江西及び廣東・廣西方面」、では長安東の潮から藍田・商州・襄州・荊州を経て廣州に達する路を唐朝の

南方に通じる大路であり、當時長安荊州間の路は長安汴州間の路に次いで大路であったと断じている。そして岳州以南の路について舟路や濕地についても觸れ詳述している。この路は安祿山の南北連絡の運河路が断たれると揚子江下流域の人々さえ荊州と商州とを経て都と往來したので重要路となったもので、特に商州は著者が注意しているように人馬の往來頻繁をきわめた。この項では秦嶺懸路の改修、上津經由の山路の開拓にも觸れている。四「漢中四川方面」では長安より洋州を経て四川に達する路をあげ、次いで長安より漢中に入る五路を示し、庫谷路・子午路・駱谷路・斜谷路・大散關路を詳細に検討し、關の等級、五路利用の變遷を説くが、こゝらあたり著書らしい着實な考證、詳細精確な論斷が讀者を惹きつける。

五「甘肅・陝西北部方面」では長安より西行して咸陽・武功・鳳翔府を経て隴關を経て西行する路、また奉天・邠州を経て西行する路を示し、これを西域に赴く二大路としている。この項で著者は會寧關を經由して黄河を越え西行して涼州に達する路を、蘭州を経て、今の莊浪河谷ぞいに北上して涼州に達する路と同様に西域への重要な路と目しているようであるが、これは會寧關經由路は遙かに意味が軽く、交通上の意義ではむしろ靈州經由、賀蘭山越え、白亭河ぞいに涼州に達する路のほうを注視する必要があるのではなからうか。會寧關經由路について、數年前、著者の見解を示していたことがあつたが、どうも私はその交通路の存在は認めるが歴史的意思はそれほど認められないと思う。本項の最後に延州、鄜州を経て、夏州に由りオルドス沙漠を渡り北行する要路を述べている。唐代の主要交通路は官路と稱され、その中の重要路は大路と呼ばれ、長安から放射線狀に發していた。もつとも重要な幹線道路は七つあつ

た。著者はよくこれを全般にわたり公正に適確に把らえて、要點を詳述している。

第二「宋代の陸路」においてはまず開封府汴京を中心に主要な八路が放射線狀に發していたとし、これも三つの地域に分けて詳論している。一「山東・河北・山西方面」では汴京から山東半島の登州に達する路、河北方面への路として滑州を通つて北上した路、河東方面への路として同州より黄河を越えて河中府、汾州を経て太原に達する路をあげている。二「南方揚子江流域以南方面」では汴河にそい東南下し宿州において二路に分かれ、臨安、鎮江方面に向う路、さらに信州、福建方面に向う路に觸れている。そして南京時代には南方から臨安に来るには信州經由路が主要となつていたと言ふ。著者は廣州から北上して汴京に達する交通には湖南路よりも江西路のほうが利用されたとして、香藥などの流通もこの交通路に由ると述べている。三「陝西・甘肅・四川方面」では蘭州・河州を経て西行する路、麟府二州が河東方面に通じる要地であつたこと、四川に達するには所謂四川大驛路が第一であつたことを述べ、成都方面に達する各路について詳細に述べている。唐代、宋代ともに著者は圖版を挿入して讀者が照合しながら理解できるよう配慮してくれてあるのは有難い。

第三「唐代の驛と郵及び進奏院」は前に坂本太郎博士がその著「上代驛制の研究」に述べられたこと、陳沅遠氏「唐代驛制考」に述べていることに不十分な點があるので、これを明らかにするため驛馬と傳馬との使用上の區別、玄宗時代の驛制改革後、それが變化弛廢する一方次第に郵が配置されたことについて論じたものである。その内容は一「驛制の發達」二「驛制の變化」三「驛制の弛

廢」四「郵とその内容」五「朝集使と進奏院」に分かれたれ、五はさらに1「朝集使」2「進奏院と進奏官」に分けている。結局、唐代に中央集権國家が形成されたため驛制が發達し驛使驛馬が多かったが、安史の亂以後は朝集使の制がすたれ進奏院が置かれ、驛夫の脚力による遞送が多くなり、宋代に步遞、馬遞・急脚遞となった、と結ぶ。從來不明確な點を明確にして論じた好論文である。

第四「唐五代の關津と商稅」は交通の取締方面として古來軍事的性格を帯びて中國に行われていた關津の考察をしたものである。唐中期以後、關津は從前に増して財政的意義を深めてくるのに注目し、五代宋代には通過稅を含めて商稅が成立、明清に承け繼がれていくという觀點に立つて當時の關津と商稅とを明らかにしている。

關とは險所に置き邪暴を防ぐために設けたもので通行人の所持品を檢し軍事警察的役目を帯びていた。津とは渡船場、橋梁等に設けられ、關も津も令丞以下の役人が置かれていた。著者は一「關津の制度」でこの制度を概述し、二「關の分布と増減」で唐代には前代に比し關數は半減しているが、その約半數は長安の周圍に存していた事實を指摘し、安史の亂後再び關數が増加、宋代に入るとまた減じていると述べる。三「商稅」では古の關市の賦の系統をひくものと言いつ唐末に成立したとしている。そして時期を逐うて商稅に變化があつたことと商稅と通行稅との差異點をあげ、通過稅自体にも觸れている。安史の亂後、關津の財政的意義が大きくなったことを強調し關名一覽表を示している。第五「宋代における遞舖の發達」は、曾我部靜雄教授のかつての論には驛と舖との區別が明らかでなく遞舖も分明でないで、これを明らかにする意圖で書かれたものである。(曾我部靜雄「宋代の驛傳郵舖」桑原博士還曆記念東洋史論

叢)一「遞舖の種類と管理・組織」二「遞舖の所在」三「遞舖の任務」四「金字牌と北宋末遞舖の弛廢」五「驛と遞舖との關係」六「斥埃舖と擺舖」に項を分つて論じる。遞舖というのは唐の後半期に入り驛制が弛んだ頃から置かれはじめ、宋代にいたり發達した制度である。これには急脚遞舖、馬遞舖、急脚馬遞舖等の種類があつたが、馬や人によつて遞送する方法に相違があつたから生じた區別である。斥遞舖とは北宋末に遞舖が弛んだ時から緊急の軍機要務に充てんがため順次各地に設けられたもので、擺舖とは擺布、つまり陳列するの意で間隔は十里毎に斥埃舖兵中の優秀な者を選んで配置した。南宋のはじめ頃淮西から江南東路方面まで邊報を傳送するために置かれたものが多い。

第六「唐宋の汴河」はまだ若かつた頃の著者の論文で「唐宋汴河考」(東方學報東京二)が内容となつている。これに圖版「隋唐三代汴河河道圖」を添え汴河にそう交通路が解り易くしてある。著者は從來明らかにされていなかった煬帝の開いた通濟渠と唐代の汴河の相違を明確に論じ、汴河にそう路の設備に觸れる。史料使用上一「宋代の汴河」を論じ、1「宋代の汴河に關する資料」2「宋代汴河の位置」を述べ、次いで二「宋以前に於ける汴河」を述べ1「唐代汴河の位置」2「古汴河に就いて」3「隋代汴河の位置」4「汴河河道に關する大村、谷森兩氏の考説に就いて」をあげ、汴河河道を詳細に論考している。晉南渡以來いよいよ揚子江流域と黃河流域を結びつける河川による交通路は重要となるが、著者のこの研究は今後とも大きい意味を失わないであろう。三「運河の構造について」は汴河の構造を述べたもので、1「運河としての汴河の設備」2「運河の關及び堰に就いて」をあげる。

第七「唐代の水路工事」は唐中期以後揚子江中下流域から洛陽や長安方面への漕運が盛んになったことに注目し、一「關東江淮方面より都長安に至る漕運路」には水路として南北連絡上もつとも重要な運河、およびこれを通じ長安にいたる漕運路の工事についての大概を述べ、二「北シナの水路」三「南シナ特に揚子江以南の水路」はそれぞれ北シナおよび南シナの水路を述べたものである。四「南北連絡の運河と都市」は唐代に南北交通が盛行し、特に玄宗時代に江淮方面から長安方面へ盛んに財物が輸送されたことを指摘し、潤州・廣陵郡・汴州・宿州等交通上主要都市について簡単に觸れてゐる。第八「唐宋時代の轉運使及び發運使」は一「唐代の轉運使」二「五代宋の轉運使」三「唐宋五代及び宋初の發運使」について述べたもの。轉運使とは玄宗以後漕運を司る專官として配置された官で、安史の亂後南方から黄河河陰に漕運される米麥量が莫大となり、したがってこの專官の新設となつたのであるが、宋代に入ると唐末に起源する發運使が代つて登場する點に注目している。

第九「宋代における漕運の發達」は一「宋代漕運の歴史的意義」二「稅物の運輸と河北・河東・陝西三路」三「廣濟河・惠民河・黄河の三河による漕運」四「汴河による六路米穀漕運」五「宋初轉運法前期の漕運」六「發運使の設置と漕米額の制定」七「轉般法とその輪送組織」八「宋の中期以後轉般法後期の漕運」九「發運司の權力強化と漕米額」十「轉般法の内容及び組織の變化」十一「宋末直達法採用以後の漕運」十二「發運司の權力縮小と漕米額」十三「直達・轉般兩法の置廢とその組織」十四「綱船と附載貨物」十五「南方からの錢帛類の漕運」から成り最後に結論を述べている。本書の各章の中でもつとも紙數を多く充てた力作で「漕運の青山」と稱された著者の面目

躍如たるものが感じられる。結局著者は宋代の漕運量は唐代より増加し、揚子江中下流の六路から汴河を経て黄河に運ばれるものは景德四年に六百萬石を定額とされ、時には七、八百萬石にも達し唐時の三倍の額に相當する盛況であつたと言ひ、都の汴京には廣濟河、汴河、惠民河、黄河の四河により漕運が行なわれたとし、その漕運方法、設備などについて詳細に述べているのである。著者の旺盛な活動期の作品だけに全體に迫力を覺える。

第二編は「唐宋時代の地誌地圖」である。第一編所收の論考はほとんど今まで發表された論文をもとにし補訂を加えたもので、唐宋時代の交通の主要材料を對象にして研究されてはゐるが、各章節がそれぞれ獨立する論文である。これに反し、第二編は全體としてまとめ、唐宋時代の地誌と地圖とについて史家に詳細にわたり參考資料を概述したものとなつてゐる。

第一「唐宋時代の總誌及び地方誌」は一「唐代の總誌」には括地志、十道四蕃志、古今郡國縣道四夷述、元和郡縣圖志等の唐代の總誌を述べ特に十道四蕃志、古今郡國縣道四夷述が外域まで含んでいる點を注意している。二「唐代の地方誌」は一「某州記、某記等と風土記の類」を掲げ、南朝時代盛行したこの類の地理書が唐代にも行われていたと述べ、やはり南方や四川に關する書が多く、官僚の手になることが多いことを指摘し、兩京新記、襄沔記、成都記、饒川記、吳興地記、吳地記等を説明、風俗記の類も簡單に觸れている。しかし、この類は主流でなく、主流となつたのは北朝系統の圖經だと言ひ、二「圖經の作成」三「圖經の體裁内容並びに作製の理由」を示すのである。著者は長安十道圖、開元十道圖、沙州伊州地誌殘卷その他の圖經類をあげ、唐代の總誌はこれら地方の圖經が資料と

なっている」と述べ、次いでこれらの圖經の内容を具體的に詳細に説明し、沿革、古蹟等を記載しなかつたわけではないがむしろ一般的な地理現状に重點が置かれていたと説いている。そして主として直接政治に参考資料として役立つ目的を以って編纂された點を強調している。これはかつて米倉二郎教授が東亞地政學序説で述べたように歷代中國の官選地理書の一大特色であつて、まことに中國における地理學發達史上注目せねばならぬところである。三「五代の總誌と地方誌」は五代における圖經作成の規定が方輿記について述べてある。四「宋代の總誌」は宋代に入りますます中央集權の官僚政治が強化され官用交通が發展したと併行して總誌の編纂されたことを述べたもので「北宋の總誌」では總誌に大規模な編纂が行われ、太平寰宇記、諸道(路)圖經、九域圖、祥符諸路圖經等のほか、職方機要、輿地廣記等をあげている。五「南宋の總誌」では金に淮水以北を占有された南宋ではついに官撰の總誌が編纂されなかつたと言ひ、著者は北宋の編纂と事情が大いに異ると力説しているのは同感である。そして南宋では私撰の地理書が多く、特に孝宗以後多くなるが歷代疆域志、九邱總要、皇朝郡縣志、輿地紀勝、方輿勝覽、聖武記等につきその成立事情、内容を述べている。五「宋代の地方誌」は「某州記某記と風土記の類」にはその書名著者名一覽表を示して概要を論じ、二「圖經作成の規定と圖經、圖志、志等の編纂狀況」三「圖經、圖志、志等の編纂の理由目的並びにその方法」四「圖經、圖志、志等の體裁と内容」において、宋代における地方圖經作成についての規定、南宋時代の地方誌一覽表、それらの内容などについて述べ、宋代に地方誌編纂事業が盛行したのは、一、中央集權の官僚政治の参考のため、二、學問文化が進歩發達したため

であると言っている。かつて一九三五年「支那に於ける歴史地理研究の變遷」を發表した著者に對し、民國の魏建猷が禹貢半月刊五一〇に評したことがあつたが、南北朝、宋代、清代を劃期とする著者の考えが一貫してここにも現われている。

第二「唐宋時代の地圖」は「唐代の地圖」二「宋代の地圖」から成る。唐代には尚書省兵部職方郎中管掌下に各州郡ごと三年一回地圖を作らせたことから筆をおこし、長安、開元、元和の十道圖、漕運圖、華夷圖のような特殊圖、異域から獻せられた封域圖に觸れ、特に賈耽の海內華夷圖について詳しい。「宋代の地圖」は「地方圖作成の規定と全國圖世界圖」二「外域圖と邊防圖」三「特殊な山川、治河、水利、交通、都會官闕等圖」に項を分けて述べている。

一は全國圖作成の基となる地方圖について述べたもので、宋初には閏年一回地方圖を作製せしめたが眞宗咸平四年五年一回とされたこと、十年一回の割合で全國圖が作られたこと、十道圖、九域圖、諸路圖經にも觸れ、特に元豐九域志について述べている。また長安の碑林にある有名な石刻華夷圖、禹跡圖、栗棘庵所藏輿地圖等をすぐれた南宋時代の輿地圖で北宋時代の作品の影響を受けていると説いている。二においては、外域圖については沈括の守令圖以外にすぐれたものがないこと、南海貿易等關係地圖にも大したものを作られていないことを述べ、その代り職貢圖類が多く作られたことを指摘、異民族との關係から北界圖、對境圖、接壤圖等が多くできたのもこの時代の特色としている。三は中でも山川圖と治河圖について重點を置いて述べている。

第三「阜昌の石刻華夷圖、禹跡圖及び淳祐の石刻地理圖」はまず「華夷圖と禹跡圖の作製とその由來」をあげ、シャペンヌ博士が

かつて石刻華夷圖、禹跡圖について研究された結果を紹介し、博士が華夷圖を契丹人の作でないかと疑ったのを批判し、宋人の作と考定し、その年代についてはシャバンヌ博士が寶元以後歴曆八年以前と考えたのに對し著者は神宗の頃と考えている。禹跡圖製作年代についてもシャバンヌ博士と異り神宗―哲宗の頃と考えている。二「華夷圖と禹跡圖の内容」では海岸線、河道、外域方面について華夷圖と禹跡圖とを比較しながらその内容を述べている。三「地圖の作製とその由來」は淳祐年間の石刻地理圖について前に小川、箭内兩博士が研究されているが分明しない點があり詳細でないので、著者は市村瓚次郎博士から借用した拓本について詳しく検討したものである。四「地理圖の内容」は三に述べた石刻地理圖を華夷圖や禹跡圖と比較しながら外部國內に分け述べたもの。これは神宗の頃、唐代の地圖を參考にして契丹圖をも併せて作成したものを原圖とし、南宋の光宗時代にいたって黃裳が北宋末地名を改め、何人かの手により四川の地名のみ理宗寶慶年間改制の地名によって改めてできたものであると断じている。そして金の侵略を認めまいとして北宋末の行政區劃の改正だけを記入して以後のそれを記入しないことは、南宋について官撰の總誌が出現しなかつた事實とともに中國の民族意識を強く感じると言う。著者の意見に全く同感である。

第四は「栗棘庵所藏の輿地圖」である。著者が東方文化學院東京研究所に居た頃、東福寺塔頭栗棘庵所藏の輿地圖を調査した結果、分明したことを紹介している。一「輿地圖の作製とその由來」二「輿地圖の内容」1「内地」2「外域」から成る。結局、この地圖は南宋光宗寧宗頃の人黃裳の作つた木刻地理圖を基にして、南宋末主要な地名の改正に手を加えてでき上つたものとしてゐる。そして

本書の裏表紙内側に本圖の圖版を折りたたんで入れてあるので、讀者はこれを見ながら讀めば理解し易い。

著者多年の研究は諸方面にわたり、歴史地理以外の論文も多く發表されているが、歴代の地理書や地圖の研究についての業績は著者が本邦の最高であろう。既發表論文がほとんどで、舊作を補訂して學者の良心が滲しみ出ている。私はこのような時期ごとに編纂された地理書地圖や、交通制度についての分厚い大著の紹介は内容を具體的にそのまま紹介するのがもつともよいと考え、内容にしたがつてあらましを述べ、間々、卑見を加えた。本書中に述べられてある内容は唐宋時代の歴史地理學者にとつてはもろろん、他の部門の史家にとつても基礎的知識としての研究の工具として利用價值が大きい。ただ、折角舊作を補訂されるならば同時に「於ける」「おける」の混同使用があり、叙述形式にも各章節に當る見出しに序言、結論の兩方あるもの、缺くもの、片方だけあるものなど一定しないのは、細いことながらいかげなものであるか。

さらに私は著者の輝かしい研究業績の集積を熟知している者だけに、今後の東洋歴史地理學という學問はこのような研究結果をふんまえて、地理學に密接しつつ方法的にも發展をさせねばならぬと思う。それが學恩に報いていく後學の私たちの態度であらう。考證され實證された歴史地理學の基本的事項が多く本書中に集積されているのである。唐宋時代歴史地理研究の工具を一揃い著者は提供してくれたのである。いかにこれを生かすかは今後の斯學に残された課題であらう。

一九六三年九月二十六日 武藏野野火止寓居にて

(前田 正名)